

[特別支援教育]

かかわることで互いに育つ交流及び共同学習

－ 自閉症・情緒障害特別支援学級在籍児童の障害理解の実践を通して－

河野進之介*

1 問題の所在

2007年4月から学校教育法の一部改正により、すべての幼稚園・学校において、障害のある子どもの支援を充実することになった。2012年7月、文部科学省のホームページには、共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進（報告）が掲載されている。この中に、多様な学びの場の整備として通常の学級がある。

しかしながら、特別支援学級在籍児童は年々増加している。このことは、学びの場が選択できる状況であっても、専門性の高い教職員から学びたいという保護者の要望があることや、まだ、通常の学級の担任に専門的な知識が不足していることが問題として挙げられる。

このことに対して、独立行政法人国立特別支援教育総合研究所のHPでは、山川ら（2010）が行った研究「多様なニーズに応じた特別支援学級の弾力的な学級経営に関する実践的研究－通常の学級との連携を図った魅力ある授業づくりを通して－」や2008年3月に「国立特別支援教育総合研究所のプロジェクト研究成果報告書『交流及び共同学習』の推進に関する実践的研究」が報告されており、交流及び共同学習の在り方に関して、実際に行う指導の参考となっている。

通常の学級にいる軽度発達障害児では、周囲の認識の乏しさからくる不適切な対応により、様々な二次的問題が生じやすいと指摘されている（宮本，2000）。さらに、毛見（2012）は、特別支援学級在籍児童が交流学級において、仲間と共に自分らしく生活し学ぶ子どもになるためには、交流教育と障害理解授業を行うことが有効であると述べている。交流及び共同学習は、単発のものではなく、継続していくことが必要なため、無理なく続けられる指導・支援が大切だと考える。

2 研究の目的

本研究の目的は交流学級の児童に対して、自閉症・情緒障害特別支援学級のA児の障害理解授業や交流活動を実施することにより、A児の得手不得手やA児ができることを頑張っていることを知り、同じ学年の友達としてかかわろうとする姿が具現することを実践を通して明らかにすることである。

3 研究の内容と方法

本研究は、交流学級の児童が、自分たちの仲間としてA児を受け入れ、ともに学びかかわろうとする姿が具現することを目指している。そのため、交流学級児童に対して、事前意識調査を行い、A児への意識についての実態を把握した上で、「障害への理解を深める活動」と「交流活動」を実施し、交流学級の児童の変容をとらえ、実施した取組の効果を検証していく。実施した取組の成果を検証するために、活動後に交流学級児童に対して事後アンケートを行い、その記述内容から児童の変容を見取っていく。

(1) 交流学級児童の実態把握

対象児の特性、A児の交流学級の実態、事前意識調査の実施については、次の通りである。

① 対象児の特性

A児は4年生の女子である。1年生入学当時から特別支援学級に在籍している。A児との会話は簡単なものは成立するが、新しい環境や慣れていない相手には自分の気持ちをうまく伝えられないことがある。

* 新潟市立鳥屋野小学校

在籍する特別支援学級は、男子7名、女子1名、合計8名のT学級で、A児は唯一の女子児童である。学級の中では、相手が上級生でも望ましくない言動を注意することができる。学習面では、国語、算数、音楽、図画工作、生活単元学習、自立活動を自学級で学習している。難しい課題であってもできるまでやり抜こうとする気持ちが強い。

A児は、理科、社会、体育、総合的な学習の時間を交流学級で学習している。字形が整わない、文字を小さく書くことが苦手であるなどの困難さがあるため、板書をノートに書き写すことに苦労している。交流学級の担任は、一斉指導の後、個別指導をしたり、ノートテイクの際、シールをトークンとして動機付けをしたりしてきた。このため、授業中、分かったことを発表したり、話し合いで自分の意見を発表したりすることには消極的だが、居心地は悪くないと感じている。しかし、学年が上がるにつれて、A児の方から積極的に話しかける場面は減ってきている。学習面では、交流学級の児童から教えてもらったり、助けてもらったりする場面が増えてきている。そのため、交流学級の児童との対等なかかわりは難しくなっていると言える。

② A児の交流学級の実態

交流学級である4年1組(男子23名、女子11名、計34名)は、活発な児童が多く、素直で思ったことはすぐに口にすると児童が多い。学級担任は特別支援教育コーディネーターである。特別な支援を要する児童も在籍しているが、配慮指導を受けているため、比較的落ち着いて学校生活を送ることができている。

③ 事前意識調査の実施(平成2X年7月中旬実施)

「Aさんのことをどう思っているか」「Aさんががんばっているなあと思っていること」「Aさんとやってみたいこと」「Aさんに質問」などを事前に交流学級の児童から書いてもらった。児童が本音を書けるようにするため、交流学級の担任が思っていることをそのまま書いて良いということを伝えた。

このアンケートでは、「聞いてみたいことがある」「もっとかかわりたい」「よく分からない」などの記述が多いことから、これまでのかかわりが浅かったと言える。しかし、うまくできないことがあってもA児が一生懸命に取り組む姿を見て、認めている感想が多かった。これらのことから、今後、両者にとって自然で、楽しい活動を組む必要があると感じた。

例えば、お楽しみ会での名刺交換である。A児の誕生日を知りたいと思う交流学級の児童はいるが、A児は自分の誕生日を答えることができない。だからといって、話す特訓をするのでは、A児が交流学級の児童に合わせるために一方的に努力することとなる。しかし、お楽しみ会で名刺交換をするならば、A児は喜んで交流学級の児童数分の名刺を作るだろう。このことにより、交流学級の児童は、A児がたくさん名刺を書いたがんばりを知って認める。また、A児自身は、交流学級の人数分名刺を作成するためにくり返し誕生日を書くので、自然と誕生日を覚えることができる。

このようにA児にとっても交流学級の児童にとっても楽しさがあり、かつ、自然な活動をするにより、互いに育つかかわりができると考えた。

(2) 障害理解授業の実施(平成2X年9月17日に実施)

① 授業のねらい

○事前に交流学級の児童が書いたアンケートにあった質問に答えたり、A児の行動の原因を一緒に考えたりすることでA児の障害理解ができる。

○A児のT学級での様子を交流学級の児童に紹介して知ってもらったり、交流学級に一人で学習に来ているA児の気持ちを考えたりする活動を通して、交流学級の児童がA児のがんばりを認め共感して、今後、一緒に活動したい気持ちを持つことができる。

② 本時の概要

～「すぐく元気」VTRで交流学級との違いを発見～

A児がT学級でポテトチップスを調理している様子をビデオで撮影し、A児が一生懸命に取り組んでいる様子を抽出し、約10分間の紹介VTRに編集した。この紹介VTRを交流学級の児童が視聴する活動を設定した。「5分間も丁寧にジャガイモを洗って皮をむいていた」「ポテトチップスの塩をよく見て多いものは落としていた」「他の子が調理している間、洗い物をしていた」などのことを説明すると、交流学級での様子との違いを発見し、「おお」とつぶやく児童がいた。(図1)



図1 VTR視聴

～「自分と同じだ」 スライドで深まる理解～

VTRに続けて、「どうしてT学級があるのか」を考えるスライド視聴の時間を設けた。「脳の働きによって見え方や感じ方が一人一人異なる」「マラソンが得意な人と苦手な人がいる。遅い人でも頑張れば褒められる学級がT学級」などの説明をした。すると、「誰にでも苦手なことはある」「ぼくと同じだ」ということを挙手で意思表示する児童が多かった。(図2)

～「気持ちを表そう」 ワークシートに感想記入～

授業の終盤に、障害理解授業で分かったこと、話を聞いて思ったこと、A児に聞いてみたいことを書く時間を設けた。事前にもアンケートを書いた経験があるためか、すぐに書き始める児童がほとんどだった。

～「みんな聞いて」 積極的な感想発表～

授業の最後に、ワークシートに書いた感想を発表する時間を設けた。8名くらいの児童が自主的に感想発表をした。自分の感想を伝えたい、障害理解授業を受けてA児のことが前よりも分かったという気持ちの表れと感じた。

(3) 招待給食(交流給食)の実践(平成2X年10月18日～平成2X+1年1月28日に実施)

① 活動のねらい

障害理解授業後の感想には、「もっとAさんとかかわりたい」T学級で積極的に話したり、リーダーのような行動をしたりしているなら、4年1組でも同じようにしてほしい」といった内容が記入されていた。こうしたA児への思いを受けて、以下のように活動のねらいを設定した。

○自分から聞きたいことを質問したり、A児とかかわったりすることができる。
○交流学級でのA児の気持ち(一人で自学級でない教室で活動する)を体験し、理解することができる。

② 活動の概要

～「一人だと緊張する」自学級以外で活動する気持ちを理解～

障害理解授業後に、交流学級児童に対して招待給食を提案した。交流学級担任には、「Aさんの気持ちを体験して理解することが目的なので、一人で来られる子は一人、そうでない子は二人組で来てほしい」と依頼した。どの児童も最初はT学級の教室が静かだったため緊張していたが、担任や介助員が話し掛けると徐々に話ができるようになった。

(図3)

また、交流給食の後、A児についての感想(考えや思い)を書く活動を設定した。

(4) 名刺交換を含む交流会の実践(平成2X+1年3月3日に実施)

① 活動のねらい

仲間集めゲームや名刺交換を行い楽しくかかわったり、A児への理解を深めたりすることができる。

② 活動の概要

招待給食後、交流学級の全児童の写真を撮り、名刺の枠に貼り付けた。その名刺には、「名前」「誕生日」「好きな食べ物」「好きな科目」「学校で好きな遊び」「一言」の6項目を記入できるようにした。この6項目は、今までの感想でA児に聞きたいこととして書かれていた内容を参考にした。交流学級の児童は一人2枚、A児は交流学級の全児童分34枚の名刺を書いて準備をした。はにかみながらもA児は、交流学級全児童と名刺交換をすることができた。

また、名刺交換を含む交流会の後、A児についての感想(考えや思い)を書く活動を設定した。



図2 スライド視聴



図3 招待給食(交流給食)

4 実践の結果と分析

(1) 児童の変容を見取るための評価規準(具現化したい子どもの姿)の設定

子どもの姿の具現を目指して障害理解授業や交流活動(交流給食、名刺交換など)の実践を行った。実践後に事後アンケートを行い、その記述から児童のA児への思いやかかわり方の変容を読み取った。主に記述からの読み取りによる評価のため、国立教育政策研究所教育課程研究センター「総合的な学習の時間における評価方法等の工夫改善のための参考資料(小学校)」(2011)を参考にした。(表1)

表1 交流の評価規準（観点別）

観点	関心・意欲・態度	思考・判断・表現	知識・理解
交流の評価規準	A児やT学級について興味・関心を持ち、A児とかかわることで知ろうとしたり、T学級を知ろうとしたりしている。	障害理解授業、交流給食、名刺交換で知ったことと自分が体験したことを結び付けて感想を書いている。また、自分から質問するなど実際にかかわっている。	A児が交流学級では、あまり話をしない、T学級では活発に話をしたり、行動したりしていることを理解している。また、その理由について理解している。

(2) 児童の事後アンケートの評価結果

取組の効果を評価するため、評価規準に基づき、次のような評価項目を設定し事後アンケートの感想を評価した。
 〈評価項目〉①A児のがんばりやよいところを知っていて、認めている。

②なぜ、A児が交流学級ではあまり話さないのか理解している。（△なぜT学級があるのか理解している。）

▼：A児が交流学級ではあまり話さないのもっと話してほしいと思っている。）

③質問がある。（興味・関心を持っている。済：質問したいことが分かったと思っている。）

④かかった経験がある。（○：自分から進んでかかった。△：かかってみてみたい。）

表2 事後アンケートの評価結果

No	事前（3つの取組前）						1回目（障害理解授業後）						2回目（交流給食後）						3回目（名刺交換後）						印象 1番
	①	②	③	④	合計	評価	①	②	③	④	合計	評価	①	②	③	④	合計	評価	①	②	③	④	合計	評価	
1	○		○	○	3	A	○		○	○	3	A		△		○	1.5	B	○	○			2	B	
2					0	C		▼	○		1	B	○	△		○	2.5	A	○	○			2	B	
3	○	▼	○		2	B	○		○		2	B	○	○			2	B		○	済	○	3	A	給食
4				△	0.5	C	○			△	1.5	B	○	○	済	○	4	A		○	済		2	B	給食
5	○	▼	○		2	B	○		○		2	B	○	△		○	2.5	A		○	済	○	3	A	給食
6	○			△	1.5	B	○		○		2	B		○		○	2	B		○	済	○	3	A	
7		▼	○		1	B	○		△	1.5	B	○	△			1.5	B		▼				0	C	
8			○		1	B	○		○	△	2.5	A				○	1	B		○	済	○	3	A	名刺
9	○			△	1.5	B		△		△	1	B		△			0.5	C	○			○	2	B	
10	○		○		2	B	○				1	B				○	1	B		○		○	2	B	授業
11					0	C	○	△			1.5	B		○			1	B		○		○	2	B	
12	○	▼			1	B		△			0.5	C				○	1	B		○	済	○	3	A	
13	○			△	1.5	B	○		○		2	B	○			○	2	B		○	済	○	3	A	
14	○		○		2	B	○				1	B		△		○	1.5	B		○		○	2	B	
15		▼	○		1	B	○	○			2	B	○	○			2	B				○	1	B	
16				○	1	B	○	○	○		3	A	○				1	A		○		○	2	B	名刺
17		▼		○	1	B		○		△	1.5	B	○	○			2	B	○				1	B	授業

(3) 児童の事後アンケートによる評価結果例と判定の理由

① 1回目：障害理解授業後のアンケート

○記述内容：Aさんとは保育園が一緒に知っていたけれど、まだまだAさんのことをよく知らないことがよく分かりました。Aさんが（4年1組の）教室に来たら、たくさん話をしてAさんのことをよく知りたいです。それにAさんが（T学級で）がんばっている姿もたくさん見られたので良かったです。質問は、どんなことをやっている時が楽しいですか？

○評価結果：A

○判断理由：障害理解授業を受け、A児がT学級で自分のできることに精一杯取り組んでいる様子のVTRを視聴し、その頑張りに気付くことができている。また、そのことを良いと感じ、今後、A児とたくさん話をする事でA児のことを理解しようとしている。さらに、具体的な質問を書いていることで、興味を持っていることが分かる。

② 2回目：交流給食後のアンケート

○記述内容：4年1組にいる時よりも元気があって楽しそうでした。学校の行きに会ったら一緒に行っているからこれからも一緒に行って仲良くしたいです。それから、Aさんの好きな物なども分かったので良かったです。

○評価結果：A

○判断理由：交流給食に来た際、実際にA児が交流学級である4年1組で過ごす様子とT学級で過ごす違いに気が付いて記述している。また、実際に交流給食でかかわる前から、登校の時、A児と会うと一緒に登校して積極的にかかわっている。さらに実際に話をすることで聞きたいと思っていたことを知ることができている。

③ 3回目：名刺交換後のアンケート

○記述内容：今日の名刺交換はみんなと遊んでとても楽しかったです。Aさんとは帰る時にしゃべります。T学級は楽しいところだと知りました。名刺交換でAさんの好きな物や趣味を知ることができて良かったです。これからも仲良くしたいです。

○評価結果：A

○判断理由：このアンケートを書いたB児自身も名刺交換を楽しむことができている。その中でA児について聞いたことを知り、普段の下校の際にも話すことができている。さらに、今後も仲良くしたいという記述がある。

(4) 児童の変容の見取り

① C児の記述からの見取り

事 前：Aさんは元気で明るい子だと思います。でも、少しだけ困っていることがあります。例えば、後ろをキョロキョロ見たり、理科で私が検流計を運んでいる途中に私から検流計を取ろうしたりすることに困っています。でも、Aさんはよく分からないことは質問しているのでそこは良いところだと思います。少しだけ直せば嫌なことがなくなります。Aさんは良い子なので、すぐ直せると思います。

1回目：AさんがT学級でがんばっている姿を見て感心しました。これからもAさんといろいろなことを楽しんでいきたいです。Aさん、がんばれ～。最近ではAさんとよくお話をしています。

2回目：T学級で楽しく給食が食べられました。Aさんが「いただきます」「ごちそうさまでした」と言ってくれて良かったです。一番良かったのは4年1組と違ってAさんが自分の机を拭くことです。偉いなぁと思いました。

3回目：今日の名刺交換は楽しかったです。Aさんの名刺を見て「誕生日って1月だったんだ」などいろいろなことが分かって余計に楽しかったです。今までの中で特に交流給食が楽しかったです。

〈考察〉 事前では「元気で明るい子」と書きつつも、「困った子」という本音が書かれている。しかし、1回目の障害理解授業後にはT学級でのA児の様子を知り、感心して意識が変化している。さらに、自分から話し掛けるなど行動も変化している。2回目の交流給食では、給食後は自分で自分の机を拭くなどT学級のルールを教わり、A児が交流学級と自学級では様子が異なることを直接見ている。最後に3回目の名刺交換では、聞いていなかったことを知り、A児の理解を深めている。

② D児の記述からの見取り

事 前：Aさんとはそんなにかかわったことがないけれど、ぼくたちは何でもやるから質問とかしてほしいです。

1回目：AさんはT学級ではみんなのお手本になっているなら4年1組で同じようにやってほしい。また、もっとおしゃべりしてほしい。質問、好きな食べ物は何ですか？

2回目：(交流給食は)かなり楽しかったです。特にAさんがおもしろかった。一緒にまねして楽しかった。

3回目：Aさんは授業で4年1組に来る時よりも交流給食や名刺交換の時の方がニコニコでした。Aさんの性格がちょっと意外でした。(暗いと思っていたのに明るかった)

〈考察〉 D児は活発な男子である。交流学級の中で積極的に話したり、行動したりしているため、A児に対しても同様の姿を期待していた。事前、1回目の障害理解授業後には、「(A児に)もっと話してほしい」と書き、A児に変化を求めている。しかし、2回目の交流給食以後には、A児の長所に注目し受け入れている。それは、障害理解授業、交流給食、名刺交換などの経験を通して、A児に対する気持ちが変化してきていると考える。

5 考察

事前アンケートの結果、「4年1組でAさんはあまり話をしないからもっと話してほしい」という記述は34名中8名だった。しかし、障害理解授業をすることで同様の回答は1名だけになり、11名は「4年1組では緊張してあまり話ができているが、T学級では元気に話したり、活動したりしている」ということに気付いた記述があった。このことから、研究の目的で述べた「交流学級の児童に対して、自閉症・情緒障害特別支援学級のA児の障害理解授業や交流活動を実施することにより、A児の得手不得手やA児ができることを頑張っていることを知る」の部分はかなり改善できたと考える。

また、障害理解授業後のアンケートの結果、34名中15名の児童が「A児とかかわりたい」と記述しているが、交流給食後のアンケートでは34名中20名、名刺交換を含む交流会後には34名中23名の児童が「A児とかかわって楽しかった」または「もっとかかわりたい」と記述している。このことから、研究目的で述べた「同じ学年の友達としてかかわろうとする姿が具現することを実践を通して明らかにする」の部分もほぼ達成できたと考える。

さらに、交流学級の児童は、4年1組の中でA児が困っていたら積極的に声を掛けたり、A児が困らないように配慮した行動をしたりする子が多く見られるようになってきた。また、年度が変わりクラス替えがあった。4年1組だった児童の中には、「また、Aさんと同じクラスになりました」「今度はT学級の〇〇さんと一緒にクラスになりました」と笑顔で担任の私に報告する児童がいた。障害理解授業、交流給食、名刺交換などを行うことで、まだA児と同じクラスになったことがない友達よりもA児のことを知っているから、A児に話し掛けるなど自分にできることを積極的にやっという様子が見られた。このことから、研究目的で述べた「同じ学年の友達としてかかわろうとする姿が具現する」の部分が継続できていると考える。

本研究では、活動後に交流学級児童に対して事後アンケートを行い、その記述内容から児童の変容を見取っていくことを中心に行った。しかし、児童の記述を読み、言動を観察していると、書きたいことが書けなかったり、書くことを面倒だと思ひ、感じたことや気持ちを表現することができていなかったりする児童がいることが分かった。このことから、そういった児童でも実際の言動を観察、記録することも評価の対象とすることが有効ではないかと考える。

また、たった一人だけではあるが、3回目の取組（名刺交換）後、「T学級と同様に交流学級でも話をしてほしい」という感想があった。A児が緊張のため、積極的に話ができていることの理解が十分でないを受け取れるが、3つの取組で交流学級の子どもたちも変わってきたから、A児にももっと話をしてほしいという期待とも受け取れる。今後、A児の表現力や積極性を高める支援も必要であると考えた。

最後に、1年の取組だけでは交流学級の児童の本音が分からなかったり、かかわり方が元に戻ったりするため、今後もA児とかかわる活動が必要である。しかしながら、交流学級の児童や担任の負担を考え、休み時間など無理なく取り組める活動を組まないと継続が難しい。これから自然に、楽しい活動を設定することで、一層、互にかかわりたいという気持ちがふくらみ、継続して交流学級の児童とA児がよりよいかかわりができると考える。具体的には、クリスマスに向けて、大きな飾りを作りたい。T学級は児童数が少ないので、交流学級の児童を対象に希望者を募集する。楽しく活動することができれば、その噂を聞きつけ、自然と交流の輪が広がると考える。このように、小さな活動を積み重ねることがかかわることが自然となる。頭で理解するより、感覚的に自然な交流ができるようにしたい。そうすることが、負担感軽減にもなる。

引用文献

毛見千春「仲間と共に自分らしく生活し学ぶ子どもをめざして：交流教育と障害理解授業を通して」『教育実践研究』

No.22, 2012年, 273-278pp

宮本信也「通常学級にいる軽度発達障害児への理解と対応：注意欠陥多動障害・学習障害・知的障害」『発達障害研究』No.21, 2000年, 262-269pp

参考文献

国立教育政策研究所教育課程研究センター「総合的な学習の時間における評価方法等の工夫改善のための参考資料（小学校）」2011年, 1-19pp, 33-61pp